

(六) 筆の選び方と保存法

1. 筆の選び方

弘法、筆を選ばずと言うが、上手な大工の鉋やのみはよく切れるのが普通である。筆にもこのことは言えるのであり、特に小さい筆を事務用として使っている人にはこの感が深いと思う。

一般に筆を選ぶ上の条件として次の四つが言われている。

◇ 尖 鋒先がとがつていること。

◇ 齊 鋒先を扁平にして一齊に揃い、凹凸がなく透明の部分が深いものほどよい。

◇ 円 筆鋒を水で固め、鋒先、喉、腹、腰と指先で回すと、どの部分もまともり良く回転すること。

◇ 健 剛毛、猷毛を問わず、腰、腹、喉、鋒先と自然に弾力があり、途中で弾力に強い弱いがなく平均していること。

たゞし、これらの四条件は伝統的な書法についての筆に言えることであり、近時、書芸美術の広範囲にわたり、多種多様な美を追求する手法からすれば、もとより右に挙げた条件にこだわる必要はないであろう。事実、筆は書家の好みによつて、形も毛の質も現に異なつている。このことは名前は適當ではないかも知れぬが、保守と革新を問わず言えると思う。要は筆の性能である開くこと、閉じること、捻じることの三つの要素を筆を使用する人の立場に立つて活用する態度こそ望ましいのである。こゝにはすでに筆の改良の問題が含まれている。

画筆の選択については毛筆とは少し異なる。参考の為に輸出の場合の規格を掲げておくが、その生命はいうまでもなく表に示す穂（鋒、毛の部分）の部分である。使用者は糊で固めてある穂をほぐして水に浸すと、穂先がばらばらになるのに気づかれることはないだろうか、こんなのはよくない画筆である。

条

件

| 項目 | 柄 | 口金 | 質 | | 穂 | 性能及外観 | 備考 | |
|----|---|---|---|--|----------------------------------|------------------------------|--|---------------------------------------|
| | | | 水彩画筆 | 日本画筆 | | | | |
| | 柄の彎曲は彎曲試験（六、二による）の結果〇、九ミリ以下であり、塗装、仕上、加工が良好で、よごれの附着その他キレツ、汚染、変色がないこと、軸の乾燥度は十八%以下であること。 | 口金はキズ、ムラがなく、メツキを施したものはフェロキシル試験（六、一による）の結果生ずる斑点数は、試験面積一平方センチ当りの斑点数が十以内であること。柄部との接合又は組立にガタ、フレ及び取付の不整が目立たないこと。 | 用毛はテン、イタチ、タヌキ、馬、リス、犬、山羊、羊、鹿、牛、アナグマ、ジャコウ猫その他これと同等以上の獣毛で調製したもの。 | テン、イタチ、リス、馬、羊、鹿、アナグマ、ジャコウ猫、山羊、牛その他これと同等以上の獣毛で調製したもの。 | テン、イタチ、豚、馬、その他これと同等以上の獣毛で調製したもの。 | 穂の腰は均一で適当な弾力を有し、穂丈の不揃いのないこと。 | 毛色、色ツヤ、毛組が良く整っていること、穂の片割れがなく、水含みが適当であつて、縮絨が良好で脱毛がないこと。 | こゝでいう筆類は毛筆、日本画筆、水彩画筆、マツキングブラシ、油絵筆をいう。 |

2. 筆の保存法

筆は保存さえよければ相当長期にわたつて使用できるものである。随つて使用者の皆さんは次のことに注意されたい。

- ◇ いつも清潔にしておくこと。塵やほこりをかぶせないようにする。これは書を学ぶ心構えでもある。
- ◇ 保存の為には丸筒やボール箱等に筆を納め、ナフタリンや樟脳を入れておくとよい。
- ◇ 墨汁のついたものには虫がつかない。墨汁に浸すことは保存上の一つの著眼点であるが、使用後は洗つ

ておくのがよい。特に鋒先を大切にしたい時は忘れてならないことである。

- ◇ 虫のつきやすい時期は三月頃から九月頃までである。この間の保存には特に以上のことをよく注意されたい。

- ◇ 使用后、筆鋒にキヤツプをかぶせる人が多いが、毛を傷けやすいから取扱をていねいにしたい。